平成25年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員旅費）報告

# 9th International Symposium on Computer Science in Sportにおける研究発表

村上　俊祐*

今回，学長裁量経費により9th International Symposium on Computer Science in Sport（IACSS 2013）における研究発表の機会をいただいたので，ここに報告する。

IACSS 2013は2013年６月18日から６月22日にトルコのMarmara Universityで開催された。Marmara Universityは法学部を始め，医学部・歯学部，体育・スポーツに係るものでは人文科学部，健康教育学部といった様々な学部からなる総合大学である。商業と経済に関する唯一の高等教育機関であった高等商業学校から1982年に大学に改組され，高等商業学校時代から数えると100年以上の歴史がある。

学会の受付
（左より本学の和田准教授，高橋准教授，筆者，田中研究員）

International Symposium on Computer Science in Sportは多くの学問分野にまたがる話題について，研究者，コーチ，エンジニア，数学者やその他の専門家などが情報交換をする学会である。スポーツに関するComputer Scienceの領域について，新しい研究結果，発見，アイデアを発表，報告するものであり，本年度が９回目の開催となる。

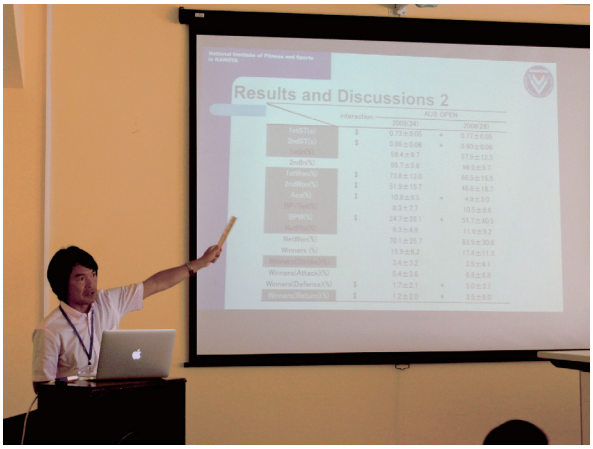
筆者は初の参加であったが，これまでInternational Symposium on Computer Science in Sportには髙橋准教授，和田准教授が数度参加している。本学会に参加することで，新しい測定機器や実験方法，どのような機器を用いてスポーツのパフォーマンスを測るのかといった研究報告の現在の動向がみられるとともに，それらを我々の研究のアイデアとすることや実際のコーチングの現場にも役立たせることにつながるだろう。筆者は審査の結果口頭発表のアクセプトを受けた。

本学からは筆者の他に，高橋准教授，和田准教

発表会場の様子

* 鹿屋体育大学大学院体育学研究科　修士課程

筆者の口頭発表の様子




髙橋准教授の口頭発表の様子

授，田中プロジェクト研究員が発表した。髙橋准教授はテニスのパフォーマンスの評価について，他の二名は体育実技科目におけるタブレットや e-Learning の利用に関する研究について発表した。また，スポーツ科学センターの宮地力先生も IACSS の理事を務められており，スポーツにおける情報管理等について貴重な情報交換の機会となった。

筆者の発表演題は「THE EFFECTS OF TENNIS PRACTICE ON THE ACQUISITION OF GROUNDSTROKE BALL SPIN」であった。修士論文のテーマであるボールの回転量に着目したグラウンドストロークのトレーニングの効果について発表を行った。

筆者の発表は，Coaching and Feedback というセッションで行われ，筆者の他にはプライオメトリックトレーニングの効果やレジスタンストレーニングの新しい指標といった実際の指導現場でのトレーニングに関する発表が行われた。

筆者の発表に対しては，対象となる N 数の不足やコントロール群が必要なのではないかという提案があった。修士論文のテーマである今回の発表演題は実際のコーチング現場での指導に基づいた質的な事例研究であることから，そうした指摘を受けたものと思われる。今後，自身の実践的な研究をどのように認めてもらうか，その手法の再考の必要性を感じた。

また筆者の専門であるテニスに関する興味深い研究としては，Australian Institute of Sports の Stuart Morgan 氏による「USING SPATIOTEMPORAL DOMINANCE FACTORS TO PREDICT SHOTS AND POINT OUTCOMES IN TENNIS: THE SWEET-SPOT」があった。数年前からテニスのグランドスラムなどで導入されているホークアイシステムを利用して，ボールの軌道などを再現したもので，その方法や精度についての報告であった。こうしたデータがより簡単に測定，入手できるようになれば，新たな視点でテニスのゲームを分析することができるようになる。こうした大きな可能性を感じさせる内容であり，今後も注目していきたいと考えている。

今回の学会は，反政府デモ（2013年トルコ反政府運動）の影響から急遽会場が変更されたこともあり，発表スケジュールの変更等アクシデントの多いものであった。英語力やプレゼンテーション能力の向上という目標に加え，やはり海外では文化の違いなどから日本と同じようにはいかないということを改めて実感できたという意味でも実りのあるものであった。

筆者にとっては国際学会での発表も初めてであったが，国内学会での発表を含めても経験が乏しいといえる。今後は研究能力についてはもちろんであるが，TOEIC 等の受験により英語力，学会発表等を重ねることによりプレゼンテーション能力の向上を図りながら，精進していきたい。

今回このような機会を与えてくださった福永学長を始め，関係各位に厚く御礼を申し上げる。